

二十一世紀の仏教と私の役割

東北大学大学院博士課程 早川 敦

仏教の最大の課題は、生死の因縁を明らかにすることである。実に、この契機を抜きにしては、仏教は決して存在し得ない。

しかし、単に生死の因縁を問うのみであれば、ジャイナ教やヴェーダーンタ学派の哲学と何の違いもない。これら外教から仏教を截然と區別する教説が、三法印と縁起説である。そしてこの二つは、生死の縁つて来たる所を具体的に示している。

三法印とは、仏教の旗印といわれる「諸行無常」、「諸方無我」、「一切皆苦」の三つである。

縁起説とは「無明」にはじまり「老死」における十二支縁起である。この世のすべてのありやうが「無常」であり、「無我」であることを知らないのが「無明」である。「無明」は縁起の各支をたどって、最終的に「老死」に至る。これらは全体でひとつの体系をなし、生死の因縁を解き明かしている。これらはまた仏教のすべての



教理の土台とな
っている。ここ
で、私は仏教を
「死の哲学」と
かりに呼ぶこと
にしよう。

さて、この「死の哲学」に関連して、わが国
では「死の美学」ということがしばしば口にさ
れる。すなわち「武士道」である。

武士道と仏教とはあいまって発展し、歴史の
あちこちに大輪の花を咲かせた。たとえば鎌倉
時代は武士道の最初の興隆期であるが、この時
代は同時に日本仏教の興隆期でもある。鎌倉武
士たちの多くは仏教、特に禅宗に帰依し、自ら
も坐禅の修行に余念がなかった。彼らは、「いつ
でも死んでみせる」という覚悟があった。そし
て、それを支える思想が、仏教の無常、無我の
教えであった。

世俗的価値は、それがいかに重大なものであ
れ、死を賭けて守るべきものではない。死んで
しまったらそれを樂しむことができなくなるか
らである。これに対して世俗を超えた価値は、
死を賭しても守るべきものである。なぜならそ
れこそは世俗の生に秩序と価値を与えるものだ
からである。仏教は世俗の我を否定し、そのこ
とによって武士たちに、世俗を超える価値を明
らかに示したのである。

死の覚悟なるものは、とりわけ日本の武士の
専売特許ではない。仏教經典には、仏道修行の
完成のために命を捨てた人々の姿が散説されて
いる。そのうちの一つ『大智度論』巻四の尸毘
王の物語を、ここに紹介しよう。

尸毘王は帰明救護陀羅尼を得、一切衆生を救
済するとう誓願を立てていた。帝釈天は彼を
試そうと考え、自ら鷹に姿を変じ、毘首羯磨天
をして鳩に変せしめ、これを追って尸毘王のも

とに至った。鳩は尸毘王のもとに逃げ込み、鷹は王に、鳩をひき渡すように迫った。王が誓願を理由にこれを拒否すると、鷹は、自分も「一切衆生」のうちのひとりであり、また鳩を奪われては飢えて死んでしまうと訴えた。他のものの肉を与えようという尸毘王に対し、鷹は殺したての肉でないとだめだという。他の生き物を殺すわけにはいかなから、王は鳩の重さの分だけの自分の肉を割いて与えることにした。王は自らの股の肉を割いてはかりにかけるが、いくら割き取っても鳩の重さにつりあわない。王はついに身体全部ではかりに乗った。帝釈天は王をまことの菩薩と認め、真実語の力で身体を回復した尸毘王に、のちには必ず仏陀となるであらうと予言し、天上に去っていった。

このような捨身の精神は、日本では太平洋戦争を境に消滅した。そして、「敬神愛国」「滅私奉公」というスローガンにかわって、「愛と平和」

というスローガンが巷間に流布するに至った。「愛と平和」という言葉は、自己否定の契機を欠いているぶんだけ、「滅私奉公」よりも耳触りがよい。しかしそれは無限の自己肯定に他ならない。かくして我々現代日本人は、命を賭すべき何物をもたないのである。

安易な自己肯定は精神の頹廢を招く。その実例は最近のレジャーブーム、財テクブーム、三K企業の人手不足などにみることができると。要するに現代人は、ヒマと金と、楽な仕事を求めているのである。「愛と平和」といえば聞こえがいいが、このようなものは生きながらの緩慢な腐敗、無明の中の生に他ならない。

最近では仏教の俗化が進んでおり、寺院の境内にゲートボール場を作ったり、本堂でカラオケ大会を催したりする寺もあるという。しかし、仏教寺院の役割は地域のコミュニティーセンターになることではない。仏教は徹頭徹尾自己否定

なのであり、むしろ世俗と一線を画し、精神の頹廢と戦い続けることこそ、あるべき仏教の姿である。このことは二十一世紀が来ようが三十二世紀になろうが、決して変わることはない。

以上述べて来たように、仏教の役割はあくまでも「否定」であると考ええる。すなわち仏教の中核は個人的レベルに存する。そこで、「私の役割」も自己否定に尽きる。だから仏教徒たるものは常に問い続けなくてはならない。

「肉体を生かして、魂を殺してよいのか」ということを。

